

り、ツキユディエスの史観を循環史観だと規定しているからである。比較的最近では、J.H. Finleyを除いて、循環史観だとの説を否定するのが普通であるが、著者はこの崩れかけた説を再興しようとするのである。しかしツキユディエスが完全な意味で歴史の繰返しを考えていたとまで説くのではない。歴史に繰返し面があることをツキユディエスは強調する傾向があるということをも根拠に、それゆゑ循環史観だということである。従つて、ツキユディエス解釈の上で大きな相違があるわけではなく、cyclical view of history という用語を、こゝで適用するのが適切か否かという言葉の問題に過ぎない。著者が何故こゝで突然にこの問題を取上げたのか、その点の説明はないが、要するに、ツキユディエスの史観は循環的であり、将来とも人間性は同一不変だと信じていたのだから、進歩史観ではあり得ない、という論旨が言外にあるのであろう。本書は小冊子でありながら、論旨の展開は混乱している。

なお末尾より少し前の個所で、進歩の思想は二つに区別されるとして、「物質的・技術的な面での進歩」はギリシア人の発見

したことであるが、近代西欧人はそれを越えて、さらに広い面での無制限の進歩を考えたという(四六頁)。しかし余りにも簡単な指摘であつて、その意味は決して充分には理解できない。最後に近代思想と古代思想との比較の方法について一言しておこう。前述のように、著者は、近代的概念を古代に投影させることの危険を警告しているが、両者を比較するためには、さらに進んで近代や現代をも相対化しておく必要がある。これは西洋の学者にとつては自らの立場を相対化することであるから、もちろん容易なことではない。例えば、「アルカイオロギア」の部分には、海上支配の重視、政治権力の作用の重視その他、地理的条件など、特殊な要素が支配しており、西欧近代の進歩思想と様相が異なる。しかし近代西欧の進歩思想にしても、地理上の発見、植民地支配、科学技術の発達、鉄や石炭の分布状況、近代国家、キリスト教の分化、その他の特殊な条件と関係しているであらう。こちらをも当然自明のものとなせず、特殊なものとして相対化して見る必要がある。また近代

西欧の進歩思想が現代において、どのようになつているのか。吾々にとつて未知なの

は、古代ではなく、むしろ近代や現代のことかも知れぬ。冒頭に掲げた Bury の著作は十九世紀中頃で終つており、それ以後を続ける人がいない。

(五九頁 一九一七年 Amsterdam, North-Holland Publishing Company)

(藤縄謙三 京都大学助教授)

J. Riley-Smith,

*What Were the Crusades?*

「十字軍」と呼ばれる運動は、欧米における最も研究文献の多い分野の一つであるのみならず、その内実はともかく言葉自身の非常なポピュラリティーの故に、比喩的な用法を含めて様々なレヴェルで様々な立場からそれへの言及が行なわれて来た。それにもかかわらず——或いはむしろそうした情況の故に——何を以つて「十字軍」と呼ぶかについての共通の理解が必ずしも確立しないまま、それぞれの論者がそれぞれの解釈に基づいて十字軍を論じて来たということがができる。聖ヨハネ騎士団と聖地國家に関する研究で知られる J. Riley-Smith は、こうした現状を踏まえて、できるだけ簡明に十字軍の定義を提出しようとする。

構成は全五章からなっており、書名と同じ標題を持つ第一章 *What Were the Crusades?* では、同時代人の十字軍理解及び背景として「正義の戦い」*Just War* と「聖戦」*Holy War* の理念について、第二章 *A Just Cause* では、十字軍が防衛或いは失地の回復を目的として掲げていたこと、そしてそれが近東のみならず、スペイン、北東欧、分派派、異端、教皇の政敵等に対する十字軍においても常に確認されること、更に当時のキリスト教世界観と結びつくことにより聖戦としての積極性を持っていたことを述べる。次いで第三章 *Legitimate Authority* では、十字軍が成立するまでの諸局面における教皇の役割を論じ、召集

「平和」勸説、財政、作戦、統制等につき個別的に考察する。第四章 *Who Were the Crusaders?* では、十字軍士たり得る基本的な条件としての誓約及びそれに伴う特権就中贖宥、十字軍士の出自とそのリーダー、参加動機、十字軍士の例としてシヨフロワ・ド・セルジューヌの伝記、騎士団等について述べる、最後の第五章 *When Were the Crusades?* では、以上の考察に基づいて十字軍の定義を示した後、十字軍の時間的期

限の問題を扱い、始期は従来通りの一〇九五年で良いこと、しかし、終期は現在の所あまり明確にし得ないことを述べて本書を終える。

全体として概ね妥当な構成と内容であるように思われるが、眼目の十字軍定義に関しては、必ずしも疑問がない訳ではない。まず「巡礼」としての性格である。勿論、十字軍を考える場合、巡礼の伝統の重要性はいくら強調されても差し支えない。しかし、著者が十字軍の始期を定める際に、バルバストロ戦役や所謂「グレゴリウス七世の十字軍」を除外する理由の一つとして巡礼を持ち出すのは問題が残るように思われる。この両者を十字軍から区別する指標としては贖宥や誓約等で十分であり、もし敢えて巡礼を指標の中に加えるなら、所謂

「非聖地十字軍」の扱いが新たな問題として登場するであろう。にもかかわらず、著者は「非聖地十字軍」が十字軍に含まれることをむしろ積極的に主張しているのである。次に、十字取得の問題がある。著者は定義に関してはあまりこれに触れていないが、十字軍というものは、その名の通り *crucisignatus* (この用語自身の初出は時代

を下るにしても) の軍隊であり、教皇による召集と諸特権の約束、そして参加者がそれに対して一定の義務を引き受ける献身の印として十字を付けることにより初めて成立するものである。従って、この十字を取るといふ行為は十字軍の基本的な要素の一つである筈であり、これについてはもう少し強調されてもよいのではないだろうか。

又、巻末に簡単なビブリオグラフィがある他は、一切註が付けられていないが、せめて最少限の引用註はあった方が便利であろう。特に、本書のようなこれから本格的な文献に当たろうとする学生向に書かれた入門書としては、むしろそれが必要なのではないだろうか。例えば、第二章などは多くの部分を *H. Roscher, Papst Innocenz III. und die Kreuzzüge* に拠っていると思しいが、確かにビブリオグラフィには名前が挙がっていないものの、本文中でも何らかの言及をすべきではないかと思われる。いずれにせよ、本書には特に目新しい叙述がある訳ではなく、結論もさして斬新なものとは言えない。しかし、著者自身が述べている如く「より野心的な史書を読む前」の学生に対する指針として書かれたもので

ある以上、もともと本書に「野心作」を期待すべきではないであろう。そしてその意味ではコンパクトに要領よくまとめられており、重宝な書であると言いうことができる。講読のテキストなどにも好適であろう。

(九二頁 一九七七年 London, Macmillan)  
(八塚春児 京都教育大学講師)

G. J. Mosse

### *Toward the Final Solution*

副題に *A History of European Racism* とあるように、本書は一八世紀から第二次世界大戦までのヨーロッパにおける人種主義の展開を扱ったものである。ユダヤ人に対するナチの蛮行を支えたイデオロギーが人種主義的反ユダヤ主義だったのはすでに周知のことであるが、このヨーロッパ思想上の恥部は従来正當な扱いを受けていたとは言いがたい。著者の目指すところは、人種主義が通俗的に捉えられているように、ヨーロッパの知的伝統からの逸脱なのでなく、逆に近代史の正統な一所産であることを示すことである。

本書は三部構成になっていて、第一部は

「端緒」と題され、一八世紀に人種思想が成立し、一九世紀にゴビノーラによって整備されていく過程を追う。主要な論点は、人種主義の成立要素として啓蒙主義と敬虔主義が大きく寄与したこと、当時の人類学が人種分類を行なう際に美的基準が導入され、後に人種主義の基本的思考形式になる、人種の価値的なステレオタイプ化を招いたことである。また人種の観点が国民的観点にすりかわって、ナシヨナリズムを促進した点も指摘される。「浸透」と題された第二部は、確立した人種主義がヨーロッパ諸国に普及していきつつ、同時に新たな要素を吸収していく過程を跡づけている。たとえばイギリスに成立したダーウィニズムや優生学、アメリカの降霊術などがその例である。そして人種主義が二〇世紀に入ると、人類学、優生学等の学問的方向と、人間間優劣差を強調する神秘主義とに分化していく傾向に注意を向けている。このような論点の中に、フランス、ドイツなどの反ユダヤ主義組織の活動の叙述が織り込まれるが、教会との関連に一章を割いて、キリスト教がなしくずしに人種主義的思考に感染していく様を追跡しているのは興味深

い。第三部「完成」は第一次大戦後の状況に始まり、ヨーロッパ諸国における反ユダヤ主義にまで言及していくが、核心をなすのはナチのユダヤ人迫害と大虐殺の経過であり、その意味で本書のクライマックスである。ここで前提として繰り返し強調されるのは敗戦と革命であって、大戦前にはフランスと比べて決して人種主義の盛んでなかったドイツが、結局ナチズムの反ユダヤ主義を経験する理由もそこに求められる。そして学問と神秘主義の分化した傾向は、ホロコーストの実行において再び統一を見るのであり、その規模と並んでこのような意味でも、ナチのユダヤ人虐殺は人種主義の極点と見なされうる。

以上の簡単な紹介でわかるように、本書はナチズムに収斂する人種主義の通史である。著者の視野はほぼヨーロッパ全域に渡っており、また神秘主義的な人種観念にとどまらず、広く擬似科学的な著作をも丹念に渉猟している。とくに第三部では、ともしれば看過されがちな東ヨーロッパにおけるファシズムの対ユダヤ人政策にも焦点をあて、人種主義あるいは反ユダヤ主義とファシズムの内的連関を考えるうえでの格好